広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	父殺し ： 日本の文字の苦悩
Author(s)	ラビ, アラー
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 20期 : 68 - 78
Issue Date	2006-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038839
Right	
Relation	

父殺し——日本の文字の苦悩

アラー・ラビ

Son cœur est un luth suspendu;

Sitôt qu'on le touche il résonne.

—De Béranger

純然たる記号。ロゴス中心的な記号でもなく、美的または詩(1)的なの中に籠もる。隠れ、潜むのでもない。そんな記号は、おそらく、意字を穿鑿しようとするときにはじめて期待されるものである。

これまでに知られている大方の文字のセットは、ほとんど、音素に基づいて音素の代理として（再び）つくり出されたものであるが、その中で４つの文字のセットは有力な表意文字と謂われている。即ち、Sumeria（シュメール）の楔形文字、古代エジプトの メドゥ・ネティエル（ヒエログリフ｜mdw ntr、神の言葉）、中国の漢字（Hànzì）、Maya（マヤ）の象形文字。

紀元前３５００年頃にシュメール人によって発明された楔形文字はピクトグラムとして創られた。長期間繰り返し使われるうちに、次第に単純化・抽象化されていったという記述があるが、実際にはピクトグラムにすぎない。

世界最初の文字

おもしろいことに、これらの中に意字のセットは、実は、一つもない。楔形文字とともにマヤの象形文字は音字的なピクトグラム（絵文字）であり、ヒエログリフは子音やアルファベットのロゴグラムであるし、漢字（Hànzì）は音字的なロゴグラムである。時代が下るにつれ、上記の文字のセットはより抽象的で簡略になっていった。とは言え、これらの文字のセットは国境に囲まれていた。これらのintroject(2)にしっかり守られているため、ロゴス中心、rhetor（修辞）的で パロール（Parole、話言葉）に仕える記号にすぎない。

ヒエログリフも楔形文字も絶え（extinct）、マヤの象形文字も廃れ（obsolete）てきたということで、これらの擬似arch表意文字のセットの中で、漢字（Hànzì）だけが残った。ヒエログリフで子音的な字母集合のシステムが初めてre-present（（再び）挙げられ｜形取られ）され た。

その中から similes（複数形 similis 比倫｜ simile 直喩）が創り出したヒエログリフの

記憶法 mnemonicの 神話的な物語 *mythos*[3]に比べると、Hànzì 漢字は、孔子（の教え）の 事が過去に起こった各事件を思い出す能力｜既往症 *anamnēsis* を具えるために、難なく、そのまま日本に入れた／入れられた。

プレリュード

ヒエログリフ・Proto-Canaanite 前カナン文字 や Hànzì 漢字 ・ かんじ 漢字 における 擬態｜別の病気の症状の性格を表す病気 mimesis を 発掘｜改装または検死のために掘り返し exhume すると、また織り込み／織り外しのフィラメントが現れる。ことに前カナン文字は「現在使われているすべての知られたアルファベットの〔上位〕祖先であり、Roman ローマの文字やBerber ベルベルの文字をはじめ、タイの文字やモンゴルの文字までも含む。朝鮮の文字も含まれるかもしれない。」[1]

前カナン文字はヒエログリフから２２文字をacrophonic的に採用した。ヒエログリフには「視号とともに声号がある。」[2]しかし、前カナン文字はそれらの声号を採用せずに、ヒエログリフの文字の中で絵文字をランダムに選択した。ヒエログリフにおいて、「記号は物の絵である」ため、既に持っていた音の代わりに「その物の〔Semitic セムの〕言語における最初の音素がその記号の表す音になる。」[3] 輸入された｜大事な *Importè-nt*なヒエログリフのもともとのエジプトの発音は、全く、用いられなかった。

ここで エジプトのことはà côté しばらくおく。

５世紀か６世紀の頃に、Confucio-sophia 儒ソフィア のパッケージの要素として、Hànzì 漢字が日本に導入された。これは孔子のテクスト、論語、孔子の跡を捕らえるためのmnemonic であるとされる。この教理、ソ

前カナンのアクロフォネム

レヴァントの紀元前１０５０年の記録に発見された前カナン文字は、フィニキア文字を通して世界のほとんどあらゆるアルファベットの祖とされる。１９０５・１９９９年に中エジプトで発見されたもっと古い文字にはレヴァント版より文字が多いので、同音文字もあったのかもしれない。

試作カナン	フェニキア	ギリシア	ラテン	シリル
𐤀	𐤀	Αα	Aa	Аа
ʾalp 牛	ʾāleph	alpha	ā	a
𐤁	𐤁	Ββ	Bb	Бб, Вв
bet 家	bēth	beta	bē	be, ve
𐤂	𐤂	Γγ	Gg	Гг
gaml ら くだ	gīmel	gamma	gē	ge
𐤃	𐤃	Δδ	Dd	Дд
digg 魚	dāleth	delta	dē	de
𐤄	𐤄	Εε	Ee	Ee, Єє
haw 歓呼	hē	epsilon	ē	ye
𐤅	𐤅	(Ϝϝ), Υυ	Ff, Uu, Vv, Ww, Yy	Уу
waw 手鉤	wāw	(fau? /digamma), upsilon	ef,u, ū, w, ī graeca	u
𐤆	𐤆	Ζζ	Zz	Зз
zen ウエ ポン	zayin	zeta	zēta	ze

クラテス的な性格のあるテクストは王の presence(御前｜現前)(4)を召還するという概念、をも含む。Sophia(上智)とは、従って、王を引用する能力、つまり alētheia(真実｜eidosを繰り返す能力)である。

Logos(ロゴス)がまず到来しなければ、reverberation(残響)は手(耳)に入れられない。

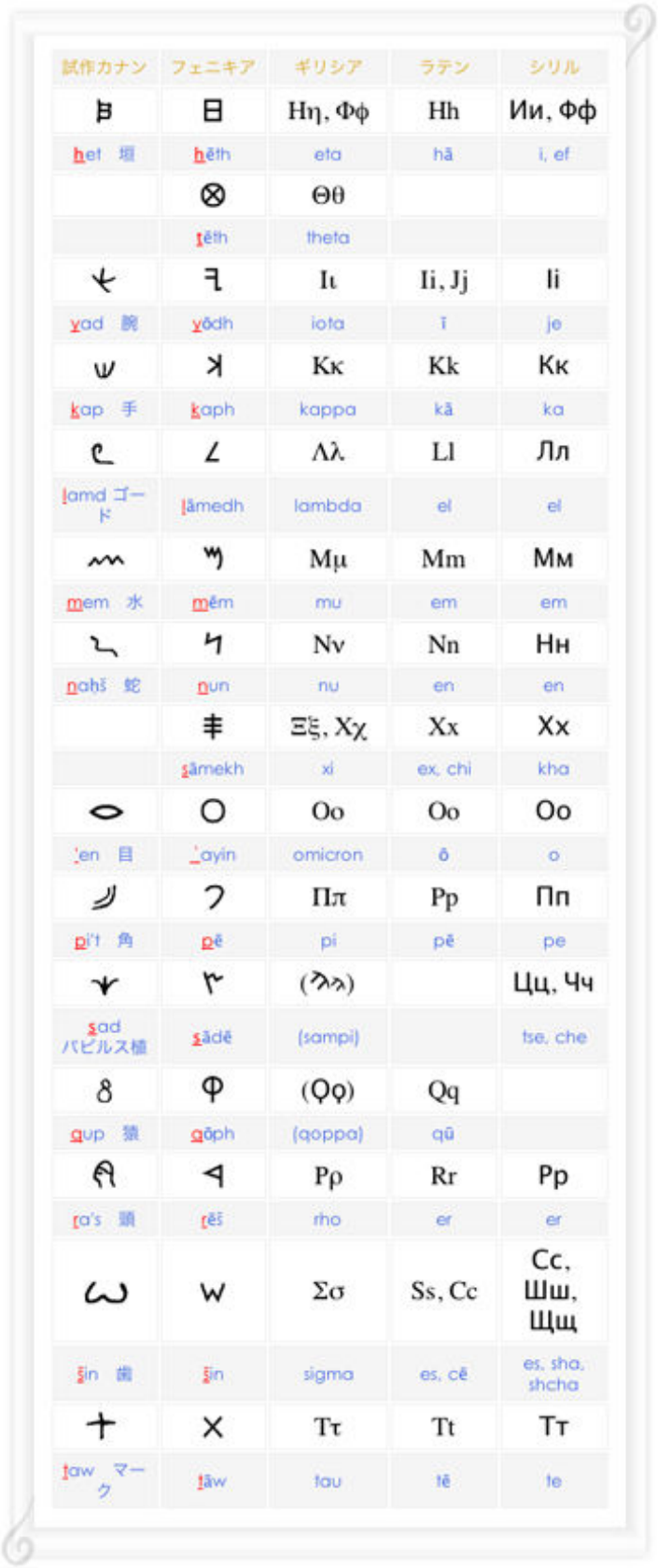
この *logos* は、実際、その流れにおいて唯一模倣されるものである。しかし、父姿(patros)の一つである孔子は日本人ではない。ゆえに、そんな *logos*、彼を招くためには、*logos* そのものを用いねばならない。そうではなければ、何も届かない。

それは惑わせることになった。まず、外(そと)のテクストが取り上げられる。そして、テクストを判読するために、テクストが記すキーを知らねばならない。

そうすると、外(そと)の *eidos*(形相)を召還することができる。しかし、キーを読むためには、テクストの *logos* を知ることが事前に必要となる。

従って、*eidos* の *lēthē*(死｜忘却)を示す漢字は「無」の *anamnēsis* である。王は既に *xenoi*(外人｜外のもの)である。王は *là*(そこ｜ここ｜どこ)に（も）いない。王は既に死んだのだから。

当時文字のシステムが存在しなかったので、漢字(Hànzì)が日本における最初の文字のシステムとなった。日本



試作カナン	フェニキア	ギリシア	ラテン	シリル
ꤲ	𐤇	Hη, Φφ	Hh	Ии, Фф
het 垣	hēth	eta	hā	i, ef
	⊗	Θθ		
	ṭēth	theta		
ꤳ	𐤉	Iι	Ii, Jj	Іі
yad 腕	yōdh	iota	ī	je
ꤴ	𐤊	Κκ	Kk	Кк
kap 手	kaph	kappa	kā	ka
ꤵ	𐤋	Λλ	Ll	Лл
lamd ゴード	lāmedh	lambda	el	el
ꤶ	𐤌	Μμ	Mm	Мм
mem 水	mēm	mu	em	em
ꤷ	𐤍	Νν	Nn	Нн
nahš 蛇	nun	nu	en	en
	𐤎	Ξξ, Χχ	Xx	Хх
	sāmekh	xi	ex, chi	kha
ꤸ	𐤏	Οο	Oo	Оо
'en 目	'ayin	omicron	ō	o
ꤹ	𐤐	Ππ	Pp	Пп
pi't 角	pē	pi	pē	pe
ꤺ	𐤑	(ϡϡ)		Цц, Чч
ṣad パピルス植	ṣādē	(sampi)		tse, che
ꤻ	𐤒	(Ϙϙ)	Qq	
qup 猿	qōph	(qoppa)	qū	
ꤼ	𐤓	Ρρ	Rr	Рр
ra's 頭	rēš	rho	er	er
ꤽ	𐤔	Σσ	Ss, Cc	Сс, Шш, Щщ
šin 歯	šin	sigma	es, cē	es, sha, shcha
ꤾ	𐤕	Ττ	Tt	Тт
ṭaw マーク	ṭāw	tau	tē	te

（人｜語）を適切に表せる代理が生み出せない *arcane*な漢字はどんどん定着し始めた。中国の六朝時代、南部の呉地方[4]から直接、あるいは朝鮮半島を経由して日本に伝わった最初の漢字の元の読み—実際には、その*approximātus*—「呉音」は漢字の*de facto*を作った。

適切な概念化の方法が見つかるまで、漢字は吟味された。*Arca*は開けっ放しになった。文字の示す意味が理解されて以来、その伝統的な[6]やまと言葉においてそれに相当するもの、またはその*approximātus*が求められた。それは文字に与えられた。漢字の発音は無視されていた。先立つ文字のシステムもなかったため、またそのようなやまと言葉の発音がない漢字もあったので、漢字に囚われた*logos*に達する道はなかった。漢字は、また、ロゴグラム的な性格を残しながら、その役割を奪われた。従って、漢字は *hupomnēsis* であり、所記の欠落により、能記としてしか用いられなくなった。しかし、能記としても、往々にして不十分であり、記号の形をそのまま似せねばならない場合もある。訓読みは、従って、既に完成した記号に付け加えられる*supplementary*であり、不必要な再読というだけではなく、*hupomnēsis*の跡ともいえる。

これで、前カナン文字と漢字のmimesisはよりはっきりと見て取れる。前カナン文字は、ヒエログリフの*analecta*である不妊の記号、ロゴだけを認め、その*logos*を全て取り除く。かたや、漢字はその上位*simulacrum*である漢字の*logos*を非 *eidetic* 的に真似る試みである。

前カナン文字の*anthologiā*は漢字の *missa* に対されている。*Anamnēsis*は*hupomnēsis*に対されている。そして、忘却は*aporia*に対される。

見切り

結局、*xenoi* である漢字は純粋に日本的な[5][7]性格を持つことになる。そして、それまで出会ったことのない概念を示すことが十分できなくなった。それは supplementary が付け加えられるきっかけであった。系統的[6][8]に、漢字にはmetanarrativeが６つあるが、その中で漢字の*genesis*に関わるのは４つだけである。[B]

象形文字、ピクトグラム。実際に存在する物の大ざっぱな *reprise* である。「日、月、木、目」など。

組み合わせるのか、混ぜ合うのか？

ヒエログリフにおいて、文字が合わせたとき、文字の各音も混交され、あわせて一回で発音される。上にある「クレオパトラ」の書き方は例の一つ。しかし、試作カナンの文字において同じシステムはなかった。

指示文字、ロゴグラム。概念の抽象化であり、数字「一[1]、二[2]、三[3]など」、方向「上[上]、下[下]」、位置「上[上]、下[下]」などを含む。

形成文字、記号的な音声文字。上の２つのジャンルの文字の組み合わせである。２つの大きな構成要素から作られた。文字の発音を表すパーツと意味内容を示すパーツである。「詩、持、時、侍などが『寺』という構成要素とともに、『シ』または『ジ』という発音も共有する。雲、雷、雪、霜などは『雨』という構成要素を共有し、どの文字も天気に関わるコンテクストを示す。」

過剰の皮肉

絵のように、会意文字の構成は、それらの関係を問わず、パーツを組み立てれば、パーツ間に意味関係が現れてくると思われた。「峠」、「嘲」などの文字において、絵だけではなく、遊び、戯れの気持ちも間違いなく読み取れる。往々にして、過剰な遊びというよりむしろ、語源の愚弄がよく伝わっている。おもしろいことに、和製漢字はほとんど会意文字といえる。

会意文字。パーツを組み合わせるだけでパーツがなじみ合えると考え、1・2 のジャンル、そして固有の文字の群れによって新たな概念を示そうとした。「【働】はロゴグラムの［人］と会意文字の【動】『会意文字の【重】「会意文字の【里】『ピクトグラムの［田］とロゴグラムの［土］からつくられた文字』を基につくられた文字」とロゴグラムの［力］からつくられた文字』からつくられた文字。」

これら４つの metanarrative を受けて、漢字の空間法(spatial)、コンフィギュレーション(configuration)も、その属性となり、新たなやまとのロゴス(Yamato-logos)を示すために実行できるようになる。

新たなロゴスは、従って、コンフィギュレーションの外(そと)にあるもの、voyou *rogue*と見なされながら、同時にその枠の中に留まっている。「働」という例｜取り出したもの *exemplum* は、コンフィギュレーションの中に残る「働-人-動-重-千-里-田-土-力」という連鎖チェーンの歴史的な光[6]をも示す例となっている。中に残りながら外に向かって開いている supplementary な国字は、習得において、*Kanji* 間違えた、過たれた、彷徨った、歩き回る〝漢字〟 *erré* である。デフォ ルメ｜構成 (de)formé、彷徨、歪曲、それらに含まれる皮肉の現前presenceをも示すコラージュ(collage)である。

固執、繰り返し、「erré の不定詞 *errer* の *alētheia*」から出 現｜併 合(e)mergeする戯れを求める感覚だ。

ストーリーはこのように始まる

（応神天皇）15年（西暦284年）の8月6日 百済王が阿直岐を遣わした　（中略）　阿直岐は（儒教の）経典も読むことができた
十五年秋八月壬戌朔丁卯、百濟王遣阿直岐。（...）　阿直岐亦能讀經典。
そこで、皇太子である菟道稚郎子の先生にした　ここにおいて、天皇は阿直岐に　お前より優れているような博士はまだいるか　と訊ねた
即太子菟道稚郎子師焉。　於是天皇問阿直岐曰、「　如勝汝博士亦有耶。　」　對曰、
（阿直岐は）　王仁という者がいまして、この者は優れています　と答えた　（中略）　（応神天皇）16年（西暦285年）の2月　王仁が来た
「　有王仁者、是秀也。　」　（...）　十六年春二月、　王仁來之。
ただちに王仁を皇太子である菟道稚郎子の先生にした（皇太子は）諸々の典籍を王仁に習い理解しないものはなかった
則太子菟道稚郎子師之。　習諸典籍於王仁。　莫不通達。

—日本書紀

百済に　もし賢人がいるのであれば献上せよとの（応神天皇の）命令を受けて　（百済が）和邇吉師という名の人を奉った
百濟國　若有賢人者貢上、　故受命以貢上人、　名和邇吉師。
そして、論語10巻　千字文1巻の　あわせて11巻（の書物）をこの人に付けて献上した
即論語十巻、千字文一巻、　并十一巻、　付是人即貢進。

—古事記

阿直岐が紹介した—そして孔子の現前まで遡る—朝鮮の伝説的な賢人（sophoi）である王仁（わに）の現前によって伝わった *sophia* は漢文が倭国でapprehension（飲み込み｜疑心）されるきっかけとなった。父姿そのものである王仁、プラトン、孔子、ソクラテスの際立つ現前は残響を残り続ける。２つの歴史書に異なる文字で書かれた王仁/プラトンは、孔子/ソクラテス（について）の話を引用する。「莫不通達」まで彼の現前を繰り返し出現しながら、その話の代理として勤めると同時に、孔子/ソクラテスを召還する。この父的な現前は漢文・漢字の体系のre-presentation（再び）提示｜表現によって強められる。中国本土の正則漢文の文法や発音に従う(4)ことは義務であった。この *sostenuto* な *simulacra* のチェーン（連鎖）は、孔子の *logos*、*eidos*、父の現前によって強化されながら、その *logos* を唱える。

義、孝、忠など孔子の *hupomnēsis* においてpatronize（賛助｜保護）された「仁」、「礼」というコアとなる概念も優越的なpater（父）の現前に条件付けられている。

王仁

父親がいる限り、彼の意志を観彼が没したなら、彼の行儀を観る３年経って父親の道を変えなければ孝のあると謂う者に成れる
父在観其志、　父没観其行、　三年無改於父之道、　可謂孝矣。(C)

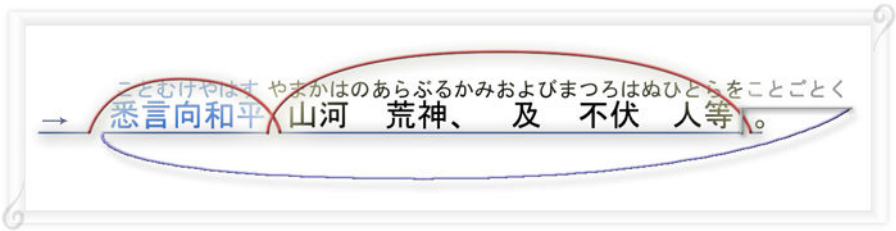
しかし、「莫不通達」、父は既に死んだ。

時代(4)が下るにつれて、漢字は外(そと)の *logos* に基づいて、外(そと)のテキスト（漢文）を記す道具として使われるようになった。そして、外(ぞと)の *eidos* を表すのに使われ、日本語、やまと言葉を記すきっかけとなった。そのために、まず漢文にその中国語の読みに加え、supplementary なやまとの読みを与えた。これは再読の一つ、つまり、翻訳である。

しの のたまはく
子曰、　われ とを あまり いつつ にして まなぶに こころざす
吾十有五而志于學。　みそぢ にして たつ
三十而立。　よそぢ にして まどはず
四十而不惑。
いそぢ にして あめの みことを しる
五十而知天命。　むそぢ にして みみ したがふ
六十而耳順。　ななそぢ にして こころの ほっする ところに したがひて のりを こへず
七十而從心所欲不踰矩。
(4,D)

この supplementary、既に完成しているシステムに不要なものを付け加えるのだが、この半開き ajarの状態は、手箱 *arca*の「外(そと)へ開く」姿勢というだけではなく、外(そと)の *logos* の現前も召還する。代替の可能性、亡父の入れ替え｜位置づけ直し *re-placement* を表す外(そと)の異父。喪中の *aporia* のうちに、父親、*logos* を（見）失って、言語を話す、理解する無能力 *aphasia* に陥り、行き違った｜間違った｜歩き回る *errant な* 孤児の無能な状態で、自身を繰り返すしかない漢字は、この *re-placement* を拒否しない。他人から息子を護る父親の決定的な不在である。他人を「力で駆逐でき、息子を助けられるのは父親だけである。ただし、それは、息子が彼を絶対に殺さないでいたらである。

父親の死が暴力の世を開く。暴力を選ぶ—最初から、これがすべての理由である—そして父親に対し暴力てをふるうことで、息子—または父殺しの文字 écriture—は、必ず、自身の本性を顕す。これは全て、第一の被害者、究極の源である亡父がそこに居ないことを確認するためである。そこにあるの D'être-là は、常に父的なディスクールの典型であり、祖国 *patrie*の土台である。」(F) errant 彷徨った孤児、*xenoi* によって、「顕われる」のは同じものの繰り返しにすぎない。*Aphasia*—父親の不在—を色濃く示す、（父、ゆえに *lēthē* に対する work of mourning 喪の作業 の）*amnesia* の（非）表現である。*Logos* の不在を確かめる意思、つまり *aphasia* である。この *errer* の *alētheia*、この *reprise* は、やまとのロゴスの亡命｜避難所 *asylum* で受け入れられ、（不）唱えられる。下記の例はそれを描く。



(4)

「やまかはのあらぶるかみおよびまつろはぬひとらをことごとくことむけやはす」と読む。

「悉言向和平」の[E]構成は、漢文の文法では、あり得ない。漢文の文法に対するこの頻繁な無視、この法を犯す暴力は無法者、人外という観念を表す。彷徨った孤児の解放。しかし、その孤児は父親殺しである。そして、恣意的に線状的な読み方にも違反する。この戯れの過剰、この*sauter-partout*（跳び回り）は倒錯者という観念を拡大する。従って、断罪を求める感覚といえる。

こうして、父殺しはまたその意味を深める。*Metanarrative* である父姿の孔子のコアとなる法を犯した漢字は背教者、「*apostatēs*」、離れて立つものである。この究極の *introject* を跳ね返すことで断罪は虚しくなり、漢字は *asylum* で、「外の過剰」という状態において、自身を顕し続ける。

居残り

7　５９年に万葉仮名の *de jure*[11]な構成により、xeniā（他人に対しての行為｜ホスピタリティ）を唱える漢字はようやく外に行くことができた。漢字は漢文から *apostasis* として用いられてきた。

夜麻登波（やまとは） 久爾能麻本呂婆（くにのまほろば） 多多那豆久（たたなづく） 阿袁加岐（あをかき） 夜麻登碁母礼流（やまごもれる） 夜麻登志宇流波斯（やまとしうるはし）。[4]

文法や音素の *simulacra* である漢字のこのような選択に読み取れる恣意性、*xeniā* の *logos* の残響[8]は、戯れの過剰をまた一歩進める。両者の代理の混交により、戯れの過剰がまた生じる。

> 山邊乃（やまのべの） 御井乎見我弖利（みゐをみがてり） 神風乃（かむかぜの） 伊勢處女等（いせをとめども） 相見鶴鴨（あひみつるかも）。[12]

また、万葉仮名は音素を反復するのに用いられていたため、その出現は頻繁になっていた。

それゆえ、暴力、戯れがさらに進行する。もともと速記のために創られたものであるが、万葉仮名の簡略化は書（道）[13]の変奏、*mimesis* となっている。ただし、*premature*（早すぎた）なものにすぎない。

わらい

ヒエログリフ・前カナン文字とは違い、未完成な *lēthē*、未完成な「父の忘却」によって、その（非）現前の *hupomnēsis*（万葉仮名）、その mimesis（国字）によって、父の不在に憑かれているうちに、離れて立つ漢字は *xeniā* に受け入れられた。父殺し。過剰。これは *lēthē* の上に棚引き、父の不在とともにその現前を唱える戯れの感覚である。この戯れの過剰は続く――*logos* の代理が、群れをなして、*Lēthē* の水を飲み[9]ながら。

あとがき（跡）

この研修レポートは短く、関わる事項をすべて含めることができない。もう一つの父姿である空海の現前や大仏の跡形などテキスト（日本の文字）が自体を脱構築するところまだあるが、ここでキーボードを置かねばならない。

文献

(1) *Wikipedia*, http://en.wikipedia.org/wiki/Proto-Canaanite_alphabet

(2) *Wikipedia*, http://en.wikipedia.org/wiki/Acrophony

(3) *Crystallinks*, http://www.crystalinks.com/phoenician.html

(4) ウィキペディア, http://ja.wikipedia.org/wiki/漢字#.E6.97.A5.E6.9C.AC

(5) 超歴史研究会, http://www.page.sannet.ne.jp/tsuzuki/sinmoji.htm

(6) ウィキペディア, http://ja.wikipedia.org/wiki/訓読み

(7) *sci.lang.japan FAQ*, http://www.sljfaq.org/afaq/kokuji-list.html

(8) ウィキペディア, http://ja.wikipedia.org/wiki/漢字#.E5.85.AD.E6.9B.B8

(9) *Wikipedia*, http://en.wikipedia.org/wiki/Shuowen_Jiezi

(A) ウィキペディア, http://ja.wikipedia.org/wiki/説文解字

(B) *Jim Brean, Monash University*, http://www.csse.monash.edu.au/~jwb/kanjitypes.html

(C) 『論語』学而第一・十一, 川辺豊, 千歳科学技術大学,
http://www.chitose.ac.jp/~kyoin/person/kawabe/rongo/rongo1.html

(D) 『論語』為政第二・四, 川辺豊, 千歳科学技術大学,

http://www.chitose.ac.jp/~kyoin/person/kawabe/rongo/rongo2.html

(E) 『古事記』景行天皇・五「倭建命の東国征伐」，日本の古典文学，東京たんけん倶楽部，

http://www.ne.jp/asahi/tokyo/tanken/newpage452.htm

(F) *Jacques Derrida, Dissemination, p.146, The University of Chicago (1981)*

(10) 『古事記』景行天皇・七「望郷の歌」，日本の古典文学，東京たんけん倶楽部，

http://www.ne.jp/asahi/tokyo/tanken/newpage452.htm

(11) ウィキペディア，http://ja.wikipedia.org/wiki/万葉集

(12) 『万葉集』巻第一・81，Japanese Text Initiative，University of Virginia Library，

http://etext.lib.virginia.edu/japanese/manyoshu/Man1Yos.html#81

(13) *Wikipedia*，http://en.wikipedia.org/wiki/Chinese_calligraphy

---

マージン

(1) 書、詩、絵、歌は metanarrative のレベルでは違うが、この場合、表意文字の書道の美的、そして芸術的な性格が動き中(in-motion)を象り、対象を真似ようとする *mimesis* はアンビバレントになる。とは言え、意字の沈黙が際立てば、音だけではなく、美も見失うこととなる。アンビバレントな状態がなければ、「美」、「詩」などの性格しか残らなくなる。表意文字の「文字」という「名」だけに対して、残った性格は「別」、「外」と見え、文字の以外な性格は自動的に消え去らせる。

(2) 精神分析学では、introjection(introjektion)は大きな不安や害を及ぼす外の脅威に対する防衛機制の一つとされる。そのような脅威を内的世界に取り込み、そこで中和し、和らがせる。もっと詳しく言えば、不在である大きな意義を持つ人（仕事へ行ってしまった母親、天国へ行ってしまった親族など）の行為、価値観などを自分に盛り込むことである。フロイトによると、自我(ich、ego)や超自我(über-ich、superego)は外(そと)の行動パターンを自分のペルソナに introject することにより構築される。

「不在の両親というイメージを自分に取り込み、それを自分の性格に融合する子供」の例とがよく使われている。(*Wikipedia*, http://en.wikipedia.org/wiki/Introjection)

従って、introject とは幼年時代に取り込まれた親の姿（そして彼らの価値観）である。「意識の声」とは、一般的に、内部に投射された親の声である。

(3) 古代エジプトの神話には、人々の記憶を高めるためにヒエログリフが創り出されたという記述がある。

(4) トート神が前ヒエログリフを創り出して以来、ヒエログリフが神から人間の手の渡るためには、神々の王であるラー神の許可が必要となった。トート神はヒエログリフを人間が記憶しやすくなるための道具とし

て紹介した。しかし、ラー神は拒否した。ヒエログリフは人間の記憶力を高める道具ではない。逆に、覚えたいものはすべて記録されるようになると、人は何も自分の頭で覚えないようなる。つまり、忘れるための道具になってしまうと言うのである。トート神がどう返事したかは記録されていない。しかし、明らかにラー神の言葉(parole)はトート神の言葉(écriture)を超えている。

(5) 漢字の前に存在した文字のシステムとして、曖昧なピクトグラムやルーンまたは朝鮮のハングルに似た「神代文字」が発見されたが、それが本物かどうかは確認できなかった。漢字(Hànzì)が導入される前に文字のシステムが存在したかどうかも確認されていない。(*Wikipedia,*
http://en.wikipedia.org/wiki/Japanese_writing_system#Early_writing_system)
とは言え、そんな文字のシステムが存在したのなら、漢字や漢文の使い方を説明する教授法や辞典など神代文字で書かれたものがあるはずであるが、そんな記録や記述がないことから、神代文字のことは否定していい。

(6) 許慎の『説文解字』序によりの六書である。

(7) フリードリヒ・ニーチェは「失念の芸術」という論において、「歴史性」を言語系統学的に破壊する。
『我々は真実への衝動がどこからくるかまだ知らない。これまで我々は社会が存在するために社会が科す強制のことだけを聞いていた。正直になるということは普通の比喩を用いるということである。ゆえに、道徳的に言えば、我々は決定的な約束によって嘘をつくように強制されている。互いを拘束するように集団に嘘をつかされているのだ。ただし、人間は事がそのように行われていることをもちろん忘れている。人間は、つまり、無意識的に、ずっと昔から確立された習慣に従い、こういうふうに嘘をついている。この「無意識」そのものによって、この忘却そのものによって、人間は真実という観念にたどり着く。』(*F. W. Nietzsche, Über Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne, NW III. ii. 375*)
そして、漢字は語源的に分析しても、そのような分析は終わらないだけではなく、実際の漢字の用い方と異なるはずである。これはルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの「ことばのゲーム」に似ている。

(8) 「〔万葉仮名を確立した万葉集は〕全文が漢字で書かれており、漢文の体裁をなしている。しかし、歌は、日本語の語順で書かれている。歌は、表意的に漢字で表したもの、表音的に漢字で表したもの、表意と表音とを併せたもの、文字を使っていないものなどがあり、多種多様である。」(ウィキペディア、
http://ja.wikipedia.org/wiki/万葉集#.E4.B8.87.E8.91.89.E4.BB.AE.E5.90.8D)

(9) ギリシアの神話によると、ハデスの5つの川の一つである「*Lēthē*」は忘却の川である。死者はこの川の水を飲まされ、生きていたときにやった事や苦しんだことなどを全て忘れるという記述がある。